

大学生の散文理解における心の理論の下位技能 (III)

:誤信念理解を抑制する後知恵に対処の必要性

○光田 基郎¹

(¹私立大学 非常勤講師)

キーワード：誤信念理解課題，後知恵対処，処理資源

Second order false belief understanding and the curse of knowledge (III).

Links between visual hindsight bias and the curse of knowledge in college students

Motoo Mitsuda,

(Private University part-time lecturer)

Key Words: false belief, curse of knowledge, story comprehension

目標と概略

1. 学生に「欺かれた振りでの報復」と「誤解」が主題の絵本各1件を画面で読み聞かせ、2次の誤信念内容の理解技能を示す実験である。2.その技能として人を欺いて誤信念内容に従わせる意図の理解に必要な(a)真実と誤信念内容の対比及び真実の抑制、(b)父が息子達を欺いて「アメの壺に猛毒在中。触れるな」と命じたが、息子が欺かれた振りでの「過失の責任を取る服毒自殺を偽装」での報復を描く絵本の文章構造と意味の理解に必要な文法、(c)意味的な類推の理解とその下位技能となる真実と誤信念内容の対比(写像)と(d)上記の情報処理の作業台となる作業記憶の負荷、特に(e)下記の方法1に示す様に誤信念理解における後知恵に対処する際の情報処理負荷増加(光田、'24)を指摘した。

方法

1. 課題は、欺かれた振りでの報復の筋立ての理解の下位技能として2肢及び4肢選択(Figure1)のサリーアン型誤信念理解課題(Birchなど、2007)が基本となる。Figure 1に示す様に姉がバイオリンを青色ケースに入れて退室後に妹が無断で(a)4個のケースの何れかに移し替えて退室、(b)妹が紫色ケースに移して退室した情報無効条件又は(c)赤色ケースに移してケースの位置も入れ替えて退室(情報追加の後知恵)条件の各々に学生を等数ずつ割り当て、姉が戻った時にどのケースからバイオリンを取り出そうとするか予想させ、各条件毎に(d)下記2の絵本毎の内容理解成績と(e)息子達が過失を装ってわざと茶器や掛軸を壊す意図は欺かれた振りでの、過失を反省した服毒自殺の偽装との理解程度の主観的な5段階評定値を求めて下記方法2の検査項との相関を求めた。

Figure1.4 肢選択誤信念課題 (Birch 等 '14 改変)



2. 上記以外に役者が人間に化けたタヌキを装って大蛇を欺いて自宅に大金を持参させる筋立ての絵本の理解と上記の「欺かれた振り」の理解との対比も試みた。

1.材料・参加者：上記の目標(1-b)のささめゆき著「附子」(講談社)より父が息子達を欺いてアメの壺を猛毒在中と偽り、「開ければ毒の風が吹くから開けるな」と教えて外出中に息子2人は扇子で壺を煽いでは恐々接近して壺を開け、中身がアメと分かって2人で食べる。次にわざと大切な茶器や掛軸を壊して「兄弟で相撲を取って誤って茶器と掛軸を壊した。叱られるから壺の毒を飲んで死ぬ気だったが、中身がアメ」と言い訳する筋立て14画面(報復文)と、(b)「たぬき衛門(藤巻

愛子著 子どものとも社)より、狸衛門という役者が大蛇に出会って人間に化けたタヌキと誤解された際にこの大蛇に「木の葉をお金に換えて怒られたので金が嫌い」と話した上にタバコの煙で大蛇を困らせたので、その報復の意図で大蛇が大金を彼の自宅に投入の筋立ての絵本読み聞かせ(誤解文)を電算録音・録画して大学1年生28名(M:20,F:8)にこの絵本2点を大画面で読み聞かせ、下記の検査項に選択反応させた。

2.検査項:(a)上記の絵本毎に内容の逐語・推理再認、(b)絵本と無関係の図形の類推、(c)反応抑制：車の絵に触れる前に時計と花の絵を指さす課題など4件、(d)文法理解(タクシーがトラックを牽く絵、ウサギがタヌキを押す絵などの選択2件及び、サルに押されて別のサルを押すヒツジの絵で示された文の入れ子構造の理解を求めた選択反応)、(e)誤信念内容理解検査で対象の予期しない移動先を問う2肢選択のサリーとアン課題、(f)Figure1に示す様に後知恵効果を検討する意図で4肢選択のサリーアン型の誤信念検査)、(g)記憶検査として別の物語記憶検査(留守番中のエピソード3件の順序構成)と(h)息子達が意図的に茶器を壊したのは父に欺かれた振りでの報復と理解した程度の5段階評定値を求めた。

結果・考察の概略

上記の方法(1a)の何れかの容器群、(1b)無関連の紫容器への移動群と(1c)の後知恵群別に欺かれた振りでの報復文の推理再認と2肢選択サリーアン型誤信念理解課題の得点と相関係数値とを求めて共分散分析した結果、(1)2肢選択サリーアン課題の得点は何れか群>2肢選択課題での紫(無関連課題)群>後知恵群($F=3.499, 5\%$)、となり、2肢選択サリーアン課題は後知恵に対処すべき条件下では処理負荷の増加を指摘し得た。

(2)上記の基本的なサリーアン型2肢選択の誤信念理解課題と報復文の推理再認との相関は何れか群($r=0.748$)>無関連群($r=0.037$)=後知恵群 $r = -0.296, F=3.476, 5\%$)となる。以上、後知恵や無関連情報への対処による正反応抑制(Birchなど'21)が求められ、心の理論の理解に必要な真実と意識内容の対比以外に、類推における対象や関係性の対比を用いた類似性と相違点の明確化(Birchなど'21, p.21)も想定し得よう。

考察と結論

光田(日心'24、日教心)と同様に本報告も後知恵対処を求めない何れか条件での高成績と小数の技能の寄与を指摘した。成人の誤信念理解においては真実と誤信念内容の対比過程でのas ifの視点での誤信念内容の承認と、類推を用いて個々の経験を一般的図式に取り込む柔軟性及び、選択的写像並びに二次的誤信念の理解における文法技能が情報処理負荷を規定する点に注目する必要性も必要で、従来の幼児の誤信念理解における後知恵効果対処以上に柔軟な実行機観の下での作業記憶研究と言語の諸機能の操作的定義とが求められよう。

文献：光田基郎 2024. 大学生の散文理解における心の理論の下位技能.大経大論集 74 巻 6 号、141-148。